

最優秀

福祉と私

相模原中等教育学校

1年

大家おおか

美幸みゆき

私には知的障害のある伯母さんがいます。伯母さんの子供のころは「障害」ということについての理解が少なかったため心ないことや嫌なことを言われて、悲しい思いをしたことがあったそうです。その経験を聞いた私は、障害への理解が少しずつ深まってきている今、障害のある人々の生活がどのように変わったのを知りたいと思いました。

今、伯母は就労支援施設という所で働いているそうです。就労支援施設とは障害や疾患がある方の就労を支援し、かつ就職し働き続けていく過程を支援する施設です。ここではクッキーやパンを作ったりチラシを封筒に入れたりなどの軽作業をしています。また、そのような作業をしながらお喋りをしたり優しい職員の人たちと一緒に楽しくすごしているそうです。そこでもらえる給料は一か月数千円程度と少ないけれど、そのお金で家族や私たちにプレゼントを買ってくれて、私たちも伯母さんも嬉しい気持ちになれます。

障害者へのサービスには、伯母さんが行っているような日常生活や社会生活を営むために必要な訓練などの支援を提供する「訓練等給付」と日常生活に必要な介護の支援を提供する「介護給付」の二種類が中心となっています。これらのサービスによって社会とのつながりが生まれ、毎日が楽しく感じられることにつながります。私の伯母さんは就労支援施設に通う前は、レストランのキッチンで皿洗いをしていたけれど、周りの人との人間関係が上手くいかなかった

たり障害者に対しての偏見などでとても悲しい思いをしたと言っていました。

しかし、就労支援施設では同じ境遇の人がたくさんいる中で楽しくお話をしながら仕事をするのができ、とても楽しく通えているそうです。

また、私の曾祖母は老人福祉施設に通っていました。一人暮らしをしていた時、八十代では掃除や洗濯、料理など何でも出来ていたけれど、九十代にさしかかると出来ないことが増えていったそうです。しかし、ヘルパーさんやデイサービスなど日帰り入浴や食事等の介護をしてくれるサービスにより自分だけでは出来ないことをしてもらったことで曾祖母の負担が減ったと言っていました。

問題が解決したかと思っていた時、曾祖母の家でトイレが壊れたり電気がつかなくなったりすると対処ができず、祖母に電話で助けを求めていたのですが、耳が遠くなりそれすらもできなくなってしまうため不安がとても大きくなってしまったそうです。

そこで老人ホームに入ることに決めました。健康チェックや食事、お風呂に入らせてくれたりたくさん仲間たちと一緒に喋りをしたりできることで、曾祖母も安心してすごすことができる場所だと喜んでいました。

このような福祉ができたのは実はここ二十年前からと最近なのです。

祖母の子供のころは福祉という言葉や概念すらなく、平気で障害者の人のことを差別したり馬鹿にするような態度で接している人が多くいたそうです。福祉制度ができたことで少しずつ障害者に対しての認識が広まりつつあります。小学校には障害のある子供たちが通う特別支援学級や勉強が苦手な子供たちのために教科ごとに普通の子供たちとはまた別に授業を受けることができる教室があります。このような学級では、学習面でのサポートが普通より手厚く受けら

れたり苦手なことをゆっくり改善することができ、子供たちにとって安心して過ごせる居場所となっています。

また、介護保険制度ができたことで、かつては子どもや家族が行うものとされていた親の介護を社会全体で支えることで家族の負担を軽減し、介護負担による離職等を減らすことができるようになりました。

また、それを通して高齢者自身も外の世界で様々な人たちと関わることができるようになりました。

もし、福祉がなければ障害者の人や高齢者の人たちが家から出る機会が減り、家族だけで世話をすることになり、障害者の家族の人にも障害者の人自身も幸せと思える人生を送ることが難しくなってしまうでしょう。

福祉は、健常者の人や障害者の人、高齢者の人の全員が社会とつながることができ、それにより充実した人間らしい幸せな人生を生きる機会を与えてくれる重要な役割を果たす制度だと思っています。
